

《巻頭言》

二宮尊徳と報徳思想



理事・拓殖大学政経学部教授 丹羽文生

今夏、栃木県真岡市にてゼミナールの合宿を行った。真岡市は農政家の二宮尊徳（金次郎）との関わりが深く、合宿中は尊徳が起居した桜町陣屋跡や桜町二宮神社を見学した。

かつては、模範的な少年の象徴として、全国津々浦々の小学校に薪を背負いながら読書をして歩く金次郎像があった。このポーズは、1891年10月に発行された幸田露伴の作品『二宮尊徳翁』（博文館）の口絵に描かれたのが最初である。筆者が通っていた小学校には木で作られた金次郎像が玄関先に飾られてあった。

ところが近年では、歩きながらスマートフォンを操作する行為を肯定する、児童労働の奨励は少年への虐待を誘発する危険性があるとして、金次郎像を撤去する小学校が相次いでいるという。実に虚しい限りである。

「何をした人か」は知らないけれど誰もがみんな知っている…。現代の日本人にとって尊徳の存在は、こんなところだろう。

尊徳は江戸中期に相模国足柄上郡栢山村の裕福な農家に生まれた。だが、洪水により耕地を失い生家が没落、若くして両親を亡くすという不幸に見舞われる。尊徳は伯父の家に引き取られ、そこで農業に励む傍ら、寸暇を惜しんで勉学に取り組んだ。

間もなく、その才を発揮する。名主の岡部伊助、次いで二宮七左衛門の家に寄宿しながら、僅かに残った生家の廃田復旧・耕作に努め、僅か1年で没落した生家を復興

させ、やがて小田原藩家老の服部十兵衛の奉公人となって服部家の財政再建にも成功する。その後、小田原藩主の大久保忠真からの依頼を受け、大久保家の分家に当たる宇津胤之助の下野国桜町領へ。ここが今の真岡市に当たる。

当時、桜町領は、田畑が荒れ果て、村人も働く意欲を失い、完全に疲弊し切っていた。そこで桜町領に移住した尊徳は、人々に質素儉約の心を説きながら様々な改革を進めた。それは「報徳思想」と呼ばれるもので、根底に「至誠」、即ち「真心」を据え、「勤労」に加えて、決められた収入の中で見合った支出を図る「分度」、その分度によって出来た余剰を家族や子孫のために蓄えると同時に世の中に提供するという「推譲」を実践するというものだった。今日においても十分に通ずる考え方である。

桜町領が復興した後、尊徳は幕臣に登用され、この報徳思想を軸にしながら関東地方を中心に600以上の村々を復興させた。真岡市は70年近い尊徳の生涯のうち約30年間を活動拠点として過ごした土地である。故に、今でも小学校の教育方針や授業の中に報徳思想のエッセンスが盛り込まれている。

ビッグモーターに代表されるように、このところ企業の不祥事が後を絶たない。拝金主義的傾向が蔓延し、損益ばかりに振り回され、「社会の公器」としての自覚が欠如しているからであろう。報徳思想を学び直す必要がある。